

# 緩山河

## 第19号

平成18年 5月15日

発行

社団法人 沼津牧水会

### 目次

牧水歌愛誦性の考察	2
第7回若山牧水顕彰 全国大会に参加	8
第52回 沼津牧水祭 短歌大会	10
碑前祭・芝酒盛	11
第18回 雛の歌会	12
文化講座	13
サロン音楽の夕べ	14
平成17年度事業報告	15
定款・編集後記	16

# 牧水歌愛誦性の考察

永田和宏



「幾山河」を詠んだ頃の牧水

若山牧水は近代歌人のなかで、歌碑のもつとも多い歌人だということを知ったのは、私が若山牧水賞をいただいたときだったと思う。歌碑の多さがすなわちポピュラリティーと直結するものでもないだろうが、牧水に限っては、まずその関係は納得できるところである。歌人としての人気ということとは別に、牧水に関しては、その愛誦性は誰もが認めるところだが、さて、それがどこからきているのか、牧水の歌のどこにその愛誦性があるのか。そんな問題意識からの牧水論を不勉強のゆえ

か、私はあまり読んだ記憶がない。

もちろん牧水の歌といえば、その青春性とそこから来る遙かなるものへの憧れ、また酒を誉むる歌、といったキャッチフレーズがちどころに思い浮かぶ。「旅の歌人」「酒の歌人」という呼称も定着していると言えるだろう。それらはいずれも明るくはなくとも、暗くはじめはしておらず、愛誦性とポピュラリティーを獲得するに充分ではある。

そのような形での牧水論はもちろん数え切れないほどにある。むしろ牧水論は、多く作品論というよりは、歌人論の色彩が強いという印象を私はもっている。牧水というエピソードの多い歌人の、その人間像に焦点をあてた論が多いと思うのである。

私はここでもう少し、牧水の歌そのものの特徴を、できるだけ歌の〈内容〉から切りはなして、形式のなから抽出して考えてみたいと思っている。

初期牧水の代表作と言われれば、誰もがあげるであろう数首をまず見ることにする。

白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも  
染まずただよふ

幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ  
国ぞ今日も旅ゆく

今さらあげるのが恥ずかしくなるほど有名な歌である。「海の声」から二首をとられれば、この二首に多くの人は落ち着くだろうし、牧水の全歌業で代表歌三首と問われて、この二首を入れる人も多いことだろう。もう少し言えば、近代の歌のなかでも、これら二首は突出して愛誦されている歌であることにまちはいいはない。

これらはあまりにも人口に膾炙しすぎて、今さら分析をする気にもならないが、一読すぐに気がつくのは、リフレインである。

一首目では「空の青」「海のを」に見られるように「青」が繰り返されている。牧水の色彩として「青」は誰もが認める大きな特徴となっているが、ここではそのキーワードが繰り返されている。

因みに大悟法利雄は、「鑑賞 若山牧水の秀歌」のなかで「日向の国都井の岬の青潮に入りゆく端に独り海見る」に関して、この「青」について指摘している。牧水の初期の歌は一般的に色彩感覚のすぐれたものが多いが、色彩というなかでも一番多いのは「青」で、す

こし注意して読むと、この『青』という色の歌われたのが実に多い。これは当時牧水の周囲の友人たちがみんな認めていたことで、歌会の互選の場合などよく牧水の歌が高点になるが、それには『青』という色の歌われていることが多いので、牧水の歌に『青』という字を入れることを禁止せよ、という声が多かったとさえ伝えられている。」というくだりもあり、興味深いエピソードである。

さて、白鳥の歌では、その青が二回も繰り返されている。「あを」という語が短いので、リフレインとしては目立たないが、「空の青」「海をあを」と繰り返されることによって、いつそう白鳥の「白」がくつきりときわだつことは言うまでもないことである。

「青」に注目すればリフレインだが、「空の青」「海をあを」をフレーズとして取りあげると、これはリフレインというよりは、対句ということになるであろう。対句についてはあとで考えることにしたいが、とりあえずこの一首については次の杜甫の絶句との比較を、対句という観点から先に見ておくことにする。

江碧鳥逾白 江碧にして鳥は逾く白く  
山青花欲然 山は青くして花は然えんと欲す  
今春看又過 今春看のあたり又た過ぐ  
何日是帰年 何の日か是れ帰年

『唐詩選』にも採られ、よく知られた杜甫の絶句である。漢詩は対句表現をそのエッセンスとして抱え込んだ詩形式である。杜甫詩においては「江碧にして」と「山は青くして」が対句となつてゐる。それらを、それぞれ「鳥は逾く白く」「花は然えんと欲す」と受けるところが漢詩の律義なところであるが、三、四句「ああ今年の春も私の見つめる目の前を過ぎていこうとしている。いつの日か故郷に帰れることやら」（黒川洋一注『中國詩人選集』）という感慨の導入として、この対句表現は欠くことができないうだろう。

「江碧にして鳥は逾く白く」における類似だけでなく、三、四句の感慨においても、杜甫の詩と牧水の一首は、どこか通じ合うところがあるようである。杜甫が帰る見通しの立たない故郷へ想いを放つてゐるとすれば、牧水は、行きどころのない青春の悲哀というものを強く揺曳している。

幾山河越えさり行かば寂しさの終てな  
む国ぞ今日も旅ゆく

先の歌よりも目立たないが、この一首にもリフレインは影を落としてゐる。二句目の「行かば」と結句の「旅ゆく」である。意味の上でも、二句目の「行かば」が仮定形ではあつても、どこか動作の繰り返しを暗示するのに

対して、結句の方は文字通り「今日も旅ゆく」現実の行動の寂しさを、現在形で歌っている。



「幾山河」を詠んだ岡山県新見市哲西町の二本松峠

この一首の秀歌性はさまざまの角度から論じることが可能であろうが、「行かば」「ゆく」というリフレインが一首に流麗な声調を与えていることはまちがいのないところである。その声調、リズムの良さは、いっぽうで「行かば」と仮定の夢想をし、それをただちに受けていやおうなく現実を引き戻されて「今日も旅ゆく」と言わなければならぬところ、青春の精神の揺れをも端的に韻律として表現しているかのようである。



左から『海の声』『独り歌へる』『別離』『路上』

けふもまたこのころの鉦をうち鳴しうち鳴  
しつつかくがれて行く 『海の声』  
先の「幾山河」の歌の直前に出てくる歌。  
「十首中国を巡りて」という一連の冒頭の  
一首で、これもよく知られている。ここでは  
「うち鳴し」のリフレインは、より鮮明な  
たちで牧水歌の声調を語っているだろう。私  
には「このころの鉦」がどういふことなのか、  
しかと解説することはできないが、その不  
明さをものともせず、一挙に心情としてわ  
かせてしまうだけの迫力が、「うち鳴し」の

フレインからくる歩行のリズムにあることは  
確認しておきたいところである。

このように、牧水の愛誦歌において、どう  
やらリフレイン、対句が、声調のうえで大き  
な力となっているらしいことがうかがえるが、  
じつさいに初期の歌集を読んでみれば、その  
多さは目をみはるばかりである。

山を見よ山に日は照る海を見よ海に日は  
照るいざ唇を君 『海の声』

雲見れば雲に木見れば木に草にあな悲し  
みの水の火は燃ゆ 『海の声』

いざ行かむ行きてまだ見ぬ山を見むこの  
さびしさに君は耐ふるや『独り歌へる』

山ねむる山のふもとに海ねむるかなしき  
春の国を旅ゆく 『別離』

海底に眼のなき魚の棲むといふ眼の無き  
魚の恋しかりけり 『路上』

いづれも牧水の代表歌とも言える歌である  
が、ここでもなぜこれらの歌が人口に膾炙し  
たかを考えれば、目はおのずからリフレイン  
に向かい、それによって導かれる声調の快さ  
に思いは落ち着くのではなからうか。

一首目の「いざ唇を君」は、  
我はもや安見兒得たり皆人の得かてにす  
とふ安見兒得たり 藤原鎌足

(『万葉集』巻二・九五)

を彷彿とさせる歌である。鎌足は座興とは言  
え、天智天皇から与えられた采女安見兒を得  
た喜びを、まことに直截に歌ったものである。  
一首が語るところのものは、ただ、皆が手に  
入れられない安見兒を遂に得た、という勝ち  
どきの声以外のものではない。もちろん背後  
には、天智への感謝の気持と、宴席でのおど  
けの身振りが濃厚だが、言っているのはただ  
ひとつ、「安見兒得たり」という喜びである。



千葉県南房総市白浜町根本海岸の牧水歌碑

牧水の一首も、言いたいことと言えただ  
ひとつ「いざ唇を君」だけである。明治四十  
年十二月、早稲田大学在学中の牧水は、恋人  
園田小枝子とともに千葉県外房根本海岸に十  
日あまり滞在することになるが、その折りの  
歌であり、「ああ接吻海そのままに日は行かず  
鳥翔ひながら死せ果てよいま」という一首も  
同時に作られた。この一首も、ほとんど口か  
らでまかせの、意味など無きに等しい歌であ  
るが、「いざ唇を君」の一首も同様の、精神の  
昂揚だけが伝わってくるという類いのうたで  
あろう。



園田小枝子

しかし、そこが歌のおもしろいところであ  
る。意味としては「いざ唇を君」だけである  
が、そこに「山を見よ山に日は照る海を見よ  
海に日は照る」なる句が付帯することによっ  
て、歌からは「いざ唇を君」の意識よりはむ

しろ、輝くばかりの海辺と、溢れるような青  
春性が前面に立ち上がってくるようである。  
「山を見よ山に日は照る」「海を見よ海に日は  
照る」と、対句とリフレインがきれいにシン  
メトリーを形成した、いかにも大胆な表現で  
ある。

意味性を希釈していったところに愛誦性が  
生まれると、かつて私は書いたことがあるが、  
その好例とも言うべき一首であろう。

「雲見れば雲に、木見れば木に、草に」とい  
う二首目では、対句表現のシンメトリックな  
リズムの快さが、三首目では、「いざ行かむ行  
きてまだ見ぬ山を見む」というつぎつぎ石段  
をスキップして駆けくだるような速度感が、  
いずれも下句の「悲しみ」や「さびしさ」な  
どの語を淡い色彩に染めなおし、決して重た  
くはない。

「海底に眼のなき魚の棲むといふ」の有名な  
歌も、下句で「眼のなき魚の恋しかりけり」  
と、ほとんど同じ内容を繰り返すというはな  
れ業に近い。そうとうに思い切った力技であ  
ろうが、そのリフレインによって意味性が希  
釈され、愛誦性が際立った。

もう少し『海の声』だけに絞って、特にそ  
の前半部から対句リフレインの顕著な作を引  
いてみる。



千葉県南房総市白浜町根本海岸

海哀し山またかなし酔ひ痴れし恋のひと  
みにあめつちもなし  
空の日に浸みかも響く青々と海鳴るあは  
れ青き海鳴る  
わが胸ゆ海のころにわが胸に海のここ  
ろゆあはれ絲鳴る  
もの見れば焼かむとぞおもふもの見れば  
消なむとぞ思ふ弱き性かな

牧水歌において、リフレインや対句の例は、まことに枚挙に暇がないというのが、実際に歌集をあたってみた実感である。それらリフレインは、修辭としてはリズムの良さや、韻律の快さなどとなって結実しているだろうが、本当は牧水は、修辭を凝らすという意識からではなく、もつと自然に口をつくように歌っていたのではないかというのが私の考えである。

よく知られているように、牧水の歌集の出版の仕方は半端ではない。『海の声』を明治四十一年に出版して以来、四十二年の『独り歌へる』、四十三年『別離』と、毎年歌集を出し続ける。三冊だけではなく、以後も四十四年の『路上』以後、遺歌集『黒松』に至るまで、ほぼ毎年のペースで歌集を出し続けるのである。その理由の大きな部分は経済的理由である。その理由の大きな部分から、牧水は一首をじっくり推敲して技巧を凝らすよりは、歌い捨てるようにどんどん歌う、あるいは話すように、歩くように歌ったのではないかと私には思われる。どの歌にも、技巧上の欠陥は隠すべくもなくあらわに見えるが、一首の完成度などにはほとんどお構いなしに歌い続け、歌い捨てているようにさえ見える。

きちんと数量的に調べたわけではないが、

印象として牧水には比喩の歌が少ない。「く」の如し」「く」に似て」といった用法がたしかに少ない。それに比して、命令や「くよ」といった呼びかけの歌、あるいは「くよ」が感嘆詞として用いられている例歌などは、例示するに事欠かない。

これらは、牧水の歌の「直情性」とでも形容したい特徴をよく示す形態的側面であろう。

比喩の少なさは、自己の心情を直截に言う、謂わば正述心緒の系譜につながる直情性として理解しやすいが、もう少しそれを形態的側面から観察すると、初句切れの多さというところ、直情性とは密接な繋がりがあろうに思われる。そう、初期の牧水には初句切れがきわめて多く、特徴的である。『海の声』から引いてみる。



第一歌集『海の声』

戸な引きそ戸の面は今しゆく春のかなし  
き満てり来よ何か泣く  
われまよふ照る日の海に中ぞらにこころ  
ねむれる君が乳の辺に  
母恋しかかる夕べのふるさとの桜咲くら  
む山の姿よ

父母よ神にも似たるこしかたに思ひ出ありや山ざくら花

君を得ぬいよいよ海の涯なきに白帆を上げぬ何のなみだぞ

これも他の近代歌人と厳密に比較したことはないが、『海の声』における初句切れの頻度は際立っているように思われる。

もう初句から結論を言ってしまうのである。いろいろ説明したり、描写したりといったまどろっこしいことはやっつけいられないというがごとく、性急に自分の思いをぶちまけている感じの歌である。「戸な引きそ」「われまよふ」「母恋し」「父母よ」「君を得ぬ」などなど、禁止の命令であったり、自己省察であったり、母を恋う思い、父母への呼びかけ、あるいは恋人を得た喜び。これらは本来なら歌の最後にくるべきフレーズであろう。あるいは言ってしまうのは駄目だと、歌会などでは必ず批判されるはずの初句である。

しかし、牧水はそんなことには拘泥しない。

言いたいことを、言いたいように言つて何が悪い。少なくとも若い時代の牧水は、そんな勢いで歌を作つていたような気がする。激情鎮めがたしといった趣きで、一気に感情を爆發させてしまうのである。

最初に思ひきつて言いたいことを言つてしまふから、その後の四句はたとえ悲しみや苦しさを歌おうと、もはや暗くならない。初句からはじめて、順々に自分の悲しみや寂しさへ語を継いでいくのではないのである。何の予備知識もない読者に、いきなりポンと自分の感情だけをさきに預けて、あとはそれとは相当にかけ離れた二句以下を奔放に疾駆させる。

このような歌い方は、牧水個人の、きわめて個人的な哀しみや悲しみ、苦しみに直結しない歌い方である。

うらかなしこがれて逢ひに来しものを驚  
きもせでひとのほほゑむ 『独り歌へる』  
悲しまず泣かずわらはぬ昼夜に馴れしか  
いまはさびしくもなし 『独り歌へる』

ここには、なぜ「うらかなし」のか、なぜ「悲しまず」なのか、読者が作者の感情を読み取ることのできる背景が完全に欠落している。牧水が、まことに彼自身の内面の苦痛や悲痛を、読者にしっかりとわかつて欲しい

ということなら、冒頭、ポンと「うらかなし」や「悲しまず」などといった、ほとんど虚辞にも近い感情語を持つてくるのは不利であるし、しかも、その背景を歌から締め出してしまうのは致命的である。

しかし、ここで牧水は、彼個人の特殊な悲しみを読者と共有しようとしているのではないように見える。個人の感情の特殊性から一歩踏み出したところで、より普遍的な青春性への回路を自己の作歌の基本においているように私には思われる。

それは特殊に拠らない分だけ、深みには欠ける。一般大衆が、誰もが、その感情の一部を共有することができ、誰もが、牧水の歌う感情や恋や出来事の一部に、自己の体験をダブらせながら読むことができる。歌われている内容が特殊でないだけ、いつそう読者は自己の体験や経験の一部をそこに反映させて味わうことが可能になる。まさに愛誦歌というものはそのようなものだ。

そして、この稿で、牧水の作品から抽出してきたいくつかの特徴は、まさに牧水の愛誦性そのものの基盤となっているはずのものではないかと私は思うのである。それが牧水の意味であり、しかも限界でもあるように私には思われる。



永田和宏氏と夫人の河野裕子氏(「沼津牧水祭・短歌大会」にて)

【筆者プロフィール】昭和二十二年滋賀県生れ。京都大学理学部物理学科卒業。京都大学教授、日本細胞生物学会会長。京都大学在学中に「京大短歌会」に入会、高安国世に師事。「塔」「幻想派」などで短歌を作り始める。「塔」短歌会主宰。朝日歌壇選者、宮中歌会始詠進歌選者。第五歌集『華氏』で第二回寺山修司賞、第六歌集『饗庭』で第三回若山牧水賞と読売文学賞、第八歌集『風位』で芸術選奨文部科学大臣賞と釈迦空賞を受賞。昨年の「沼津牧水祭・短歌大会」に、夫人の河野裕子氏(第九歌集『歩く』で第六回若山牧水賞受賞)と共に講師を務めていただく。

## 第七回 若山牧水顕彰

### 全国大会に参加して

大島 葉子  
(沼津牧水会事務局)

平成十七年五月二十六、二十七日の両日、牧水生誕百二十周年並びに若山牧水記念文学館の開館を記念して「若山牧水顕彰全国大会」が、牧水の故郷宮崎県東郷町で開催された。



シンポジウム (左から 小島ゆかり、福島泰樹、榎本篁子  
伊藤一彦、栗木京子、根井眞紀子の諸氏)

前回の延岡での全国大会から早や三年、楽しかったツアーをもう一度と参加を呼びかけたところ、十四名の申し込みがあった。

五月二十五日、午後五時過ぎに沼津駅に集合、三島で新幹線に乗り換え、京都から午後八時二十分発の寝台特急「彗星」に乗車。以前はロビーカーがあつたはずだが、最近はなくなつてしまつたらしい。寝台列車がどんどんなくなつてきているという。これも時代の流れなのかとさびしく思った。約半日をかけ、二十六日朝九時四十二分日向市に到着。ここから車で三十分、会場の東郷町総合文化センターへ着く。

大会は、開会式につづいて大岡信氏の記念講演。その後、用意していただいた手づくりのおいしい昼食をいただき、人心地のついた後、午後からの「牧水顕彰活動に関する提言」「若山牧水記念文学館と生家の紹介」「シンポジウム」へと進んだ。

夕方からは会場を日向市のホテルベルフォート日向に移し、レセプションが催された。話が弾み、時の経つのも忘れて交流を深めた。

翌二十七日は、歌碑祭、牧水生家見学、若山牧水記念文学館開館セレモニーと続いた。歌碑祭では坪谷中学校生徒による合唱、また文学館開館セレモニーでは、坪谷幼稚園の園児たちの葉玉を割る姿がほほえましく映った。



若山牧水記念文学館開館セレモニーの葉玉割り

新しい文学館は、宮崎県産のスギやヒノキを用いた木造平屋建で、エントランスから展示室へのアプローチが明るい作りとなつており、ラウンジベランダからは開放感あふれる風景が一望できる。展示室は三つに分かれて





若山牧水記念文学館

いて、牧水の資料を集めた第一展示室。中原中也と親交があった詩人高森文夫元東郷町長の資料を集めた第二展示室。第三の企画展示室は、若山牧水賞とその受賞者の紹介をしていて、現代短歌の世界を感じることができるようになっていた。

職員の方のお話によると、当初文学館へは土足のまま入るように考えられたようだが、靴を脱いで見学するように変更したという。

素足のまま入ったときの木のぬくもりが心地よく感じた。展示室の構成など沼津とは違ったよさがあり、今後の参考にと見入った。ラウンジベランダで行われていた茶席で抹茶を頂戴したが、初夏の風を感じるホッとしたりひとときであった。

牧水公園内にある研修施設「ふるさとの家」でいただいた昼食にまたまた舌鼓を打ち、午後からは、川並俊一会長以下十二名の若山牧水延岡顕彰会の方々と阿蘇山へのバスツアーとなった。

延岡駅前で延岡顕彰会の参加者と合流し、高千穂峡を橋の上から眺めるなどバスツアーをたのしみながら宿泊先の南阿蘇休暇村へ到着。阿蘇山根子岳が展望できる雄大な風景にただただ溜息。夜の交流会も和やかに過ぎ、翌二十八日には阿蘇から熊本に足を伸ばし、熊本城を見学。平成十九年に築城四百年を迎える熊本城の本丸御殿復元工事が行われていた。その後、熊本空港で昼食をとり、ここで、飛行機で帰るものと熊本菊池温泉へもう一泊とするものと分かれた。

牧水生誕の地の牧水顕彰へのあふれるほどの熱意に打たれた四日間だった。今回の旅行でも、東郷町や延岡市の皆さまのお世話になった。この紙面を借りてお礼を申し上げたい。



若山牧水延岡顕彰会の方々と記念撮影（阿蘇山根子岳を背景に）

沼津からのツアー参加者は、浅井治、有賀直子、大島葉子、金子安夫、北村正昭、小出和夫、杉山重義、鈴木弘行、千野慎一郎、長澤靖夫、林茂樹、三宅芳則及び市教委から三澤幸男、小野義雄の十四名。（なお、保坂輝夫、淳江夫妻が全国大会に参加）

# 第52回沼津牧水祭 短歌大会

十月二日(日)  
午前十時三十分  
沼津市立図書館  
視聴覚ホール

沼津牧水祭短歌大会は、『塔』主宰の永田

和宏先生、『塔』選者の河野裕子先生ご夫妻を講師にお招きし、たいへん楽しい会になった。

午前中の講話は、「牧水賞の歌人たち」と題して対談形式で行われたが、若山牧水賞の受賞作家高野公彦氏の作品

わが幼時、百葉箱がひっそりと夕日を浴びて立つてみました

大き湖も小さき湖も四隅より水昏れてゆく水の国近江

にふれて高野氏の作品のよさを語られた。

面白かったのは、「歌との出会い」として河野先生が少女期の文学的環境から幼くして作歌を始めたのに対して、永田先生の高校生になって初めて歌に出合わせてくれた先生の話。

対談は奔放に語られる短歌談議で、一時間という時間の短かさを痛感させられた。特筆したいのは、「歌会」の効用に触れた点で、「歌会は歌の読み方を教えてくれる」ところだという指摘が印象に残った。

## 【入賞作品】

牧水賞一席 富士市 川辺 典代

父母のみ墓を守る合歓の木の花の盛りとおもいて眠る

牧水賞二席 和歌山県 助野貴美子

をさな児はビニールプールに座りたり水面はひかる出べそのあたり

牧水賞三席 御殿場市 土屋さち子

もう少しもうあとすこし月光に稲刈り進む父母と私

永田和宏先生選

引越せる子の荷に混じる6kgのダンベルひとつ持ち上げてみる 東郷 悦子

濃緑の湖水の重さを吐き出せる放水口に虹のかかれり 竹島 睦

何といふ用事もなきに立寄りて水飲みてゆけり中一の孫 金子 芳子

夏帽を失くしてかへり来しここは信州しなの塩尻の驛 河辺龍二郎

手榴弾のピン抜く記憶まざまざと炭酸飲料の上蓋を引く 長田 純

河野裕子先生選  
手すり付け姑の退院待ちてゐる亡夫の知らざることの一つに 佐野 啓子

ほほづきの鉢ごと電車に揺れながら母とをみなご手をつなぎ立つ 小佐野豊子

友の骨の温かきを拾ふ病む床にさすりし腕はこのあたりかと 桜井 光子

引越せる子の荷に混じる6kgのダンベルひとつ持ち上げてみる 東郷 悦子

通過する皇后様を撮らむとし結局なにも見てゐなかつた 前田 鐵江

市長賞

ただ二日留守にしたるに漂流者の貌して夫はわれを待ちおり 森田小夜子

市議会議長賞

手榴弾のピン抜く記憶まざまざと炭酸飲料の上蓋を引く 長田 純

以下互選順位順 三位から八位まで  
泥のやうにわれは眠れり霧のやうに病む母眠る 春の病棟 定石 栄

何といふ用事もなきに立寄りて水飲みてゆけり中一の孫 金子 芳子

嘘ひとつつきて帰りし厨辺に茶碗の底の汚れをぬぐう 長田多津恵

ほほづきの鉢ごと電車に揺れながら母とをみなご手をつなぎ立つ 小佐野豊子

足悪き客の座るを見届けてバスは静かに走り出したり 則次千代子

それぞれの生き様見せず立つ墓のみな一様に光る海向く 樽松 靖彦

(河先生の講演風景は七頁に掲載) (須永秀生)

第52回

## 沼津牧水祭

碑前祭・芝酒盛

十月十六日(日) 午前十一時



前日の雨は朝まで残り、間際まで空模様を気にしながらの開催となりました。

斎藤衛沼津市長、工藤達朗沼津市教育長、松田英子沼津市議会副議長、文教消防委員会所属委員をはじめとする市議会議員、牧水の生地宮崎県東郷町の塩月秀行教育委員長、根井真紀子東郷町立坪谷小学校校長、那須文美東郷町若山牧水記念文学館事務局長、田原大三

東京牧水会事務局長等の遠来の方々の参加も得て、にぎやかに式典が行われました。

琴城会沼津が奏でる大正琴の音が流れ、定刻の午前十一時に開会。林理事長の挨拶、斎藤市長と工藤教育長の祝辞に続き、榎本篁子当館館長の献花、献酒と挨拶がありました。

岳心流沼津愛吟国風会による牧水短歌の詩吟朗詠、六月に亡くなられた舞踊家花柳稔氏に代わる長男寿宗氏による牧水の短歌と詩「枯野の旅」の舞踊が披露されました。また、第十六回「中学生短歌コンクール」の特選入賞者の表彰式では、若さを感じる新鮮な短歌に参加者から大きな拍手がありました。

「牧水のうたを歌う会」の牧水短歌四首の美しいハーモニーは、千本松原に吸い込まれてゆくようでした。

斎藤市長、松田副議長、塩月東郷町教育委員長、根井坪谷小学校校長、榎本館長の五名の方が樽酒の鏡を開き、松田副議長の乾杯で芝酒盛が始まりました。湿った芝生の上にシートを敷き、車座になったの交流が進み、裾野五竜太鼓の秋山ファミリーの勇ましい太鼓や「健脚牧水、碑前の宴」の独自のレパートリーを持つ太鼓教室「井」の響きを肴に一年振りの芝酒盛をそれぞれの参加者が楽しんでいました。



記念館には、初参加の茶道裏千家流「宗菊会」(上村宗菊代表)による茶席が設けられ、入館者や芝酒盛参加者も館内で一服の抹茶を楽しめました。不順な天候に悩まされながらも充実した碑前祭でした。(金子安夫)

第18回  
雛の歌会



第十八回「雛の歌会」は、平成十八年三月十一日(土)午後、第九回若山牧水賞受賞者で「かりん」の米川千嘉子先生をお招きして行われた。投稿数九十三首、参加者は六十三名。会場を沼津倶楽部の広間に移して開催された。ゆったりとした会場で和やかな雰囲気であった。米川先生のお話は、丁寧で繊細な説得力のある批評で、参加者はみな納得の表情であった。

例えば、

裏山にけんぼんなしの降るころか想い出  
かもす古里の駅 塩谷千鶴子

に対して、けんぼんなしの存在感を肯定し、「想い出かもす」の説明が作品を弱めていると指摘。駅に居るのだから、そこでの感慨を大事にと、まとめられた。

歳晩を人混みの中に夫をみる居る筈のな  
きそら似の夫を 小野さと子

では、夫に似た人が何をしていたかが大事。例えば傍らの女性の服を選んでいたりしたら思いの深さが出てこよう、などと。

全体を通して感じたことは「主観を捨てて、具体的に詠うことで対象に対する愛情が出る。」に収斂されようか。「これは取れる」との具体的な指摘が、饒舌になりやすい私たちの姿勢に警鐘を鳴らしてくれたように思う。先生の選んだ十首を挙げる。(掲載順は、応募順。)

蜘蛛の糸にかかりし落葉の紅・黄色 吊  
し雛めく野路のあちこち 勝亦はる江  
蜘蛛の糸にかかった落葉と吊し雛の取り合  
わせの面白さ。あちこちが落ち着かない。

先代の遺影外せば支えぬし鴨居がほうと  
力を抜きぬ 前田鐵江  
鴨居が力を抜くという見方の面白さ。「支え

るし」が取れそう。

石塊の如きが目覚めおもむるに今日のひ  
と日のいのちとはなる 青木朝子

いのちとはなるの「は」の使い方が巧み。  
朝より水の匂ひのかぐはしく雪降りりう  
つすらと木に花に畑に 須永秀生  
第五句を字余りの散文的にして、きれいさを  
淡さに変える技法が見どころ。

寿命とか余命とかとを考えて八年、十年  
の日記選びいる 諸星三郎

夫婦で日記を選んでいる風景が浮かぶとい  
う読みに感心した。「とかとを」が工夫された。

銀杏紅葉ことばとなつて降りしきる「生  
命惜しめ」と杖引く吾に 藤井初恵

銀杏紅葉は黄葉の方がよかつたか。  
春北風に落ちし椿を石塀に並べて見らば  
終業式へ 芳園やよい

終業式へ行く子供のやさしさ。  
鎌の音にもおどろかぬらし吾れのみ  
の山 畑にうぐひす長く鳴きをり 芳崎セイ子

屋根あかき保育園より湧くこゑをからだ  
に受けて裏山のぼる 小山弘子

独身を通しし吾が独身の姪と諍ふ嫁がせ  
たくて 丸山喜美子

終了後の講師を困んでの有志による懇親会  
も楽しいひとときであった。

# 文化講座

## 「家紋の世界」

日時 平成17年9月10日(土) 午後1時30分～3時30分

講師 八十濱俊一氏



好評だった「家紋の講座」第4講である。細密で美しい手描きの資料をもとに、色々な家紋の名称や由緒、その変遷等が語られた。ますます興味が湧いてきたと感想を述べる受講者が多かった。

講義をはさんで、9月6日(火)から19日(月)まで「家紋の世界」の資料展示も行われた。

## 書道講座

日時 平成17年4月～平成18年3月  
毎月第3火曜日 午後1時～3時

講師 成田真洞氏

## 初心者のための短歌講座 牧水記念館短歌会

日時 平成17年4月～平成18年3月  
毎月第2土曜日 午前・午後

講師 須永秀生氏



# サロン音楽の夕べ

沼津市若山牧水記念館ラウンジ



## 第1回 古楽コンサートシリーズ17 『古楽器による郷愁のコンサート』

日 時：平成17年6月25日(土) 午後6時45分  
出 演：上杉紅童 (リコーダー、横笛)  
堅田喜代 (小鼓、大鼓)  
杉山佳代 (チェンバロ)  
来場者：137人

## 第2回 『山本周五郎原作 男と女の人情歌物語』

日 時：平成17年7月26日(火) 午後6時30分  
会 場：沼津市千本プラザ音楽ホール「松籟」  
出 演：岡村喬生(バス・バリトン)  
磯部周平(クラリネット)  
安田裕子 (ピアノ)  
来場者：193人



## 第3回 久元祐子ピアノ名曲コンサートII 『初秋に聴くクラシック』

日 時：平成17年9月3日(土) 午後6時30分  
出 演：久元祐子(ピアノ)  
来場者：74人

## 第4回 『モーツァルトとドビュッシー歌曲の夕べ』

日 時：平成17年11月12日(土) 午後6時30分  
出 演：濱野さえ子 (ソプラノ)  
伊藤典子 (ピアノ)  
鈴木千香子 (メゾソプラノ)  
沼野真弓 (ピアノ)  
来場者：101人



## 第5回 古楽コンサートシリーズ18 『ヴィオラ・ダ・ガンバとチェンバロの夕べ』

日 時：平成18年2月18日(土) 午後6時45分  
出 演：神戸愉樹美 (ヴィオラ・ダ・ガンバ)  
杉山佳代 (チェンバロ)  
来場者：125人

第6回 藤原真理チェロリサイタル『白鳥』  
日 時：平成18年3月4日(土) 午後6時30分  
出 演：藤原真理 (チェロ)  
丸山滋 (ピアノ)  
来場者：133人



# 平成17年度事業報告

総会 (第19回) 平成17年 5月13日(金) 午後6時～7時  
 理事会 第1回 (通算101回) 平成17年 4月21日(木) 午後6時～7時30分  
 第2回 (通算102回) 平成17年 8月26日(金) 午後6時～7時  
 第3回 (通算103回) 平成17年11月29日(火) 午後6時～7時  
 第4回 (通算104回) 平成18年 3月 7日(火) 午後6時～7時

会報発行  
 第18号発行 平成17年 5月15日  
 館報発行  
 第35号発行 平成17年 9月10日  
 第36号発行 平成18年 3月15日

## 1 調査研究事業

- (1) 第7回「若山牧水顕彰全国大会」  
 (宮崎県東郷町、東郷町教育委員会主催)  
 期 日：平成17年 5月26日(木)～5月27日(金)  
 初 日：歌のアルバム、開会式、記念講演、牧水顕彰活動に関する提言、若山牧水記念文学館と生家の紹介、シンポジウム、牧水サミット(会場：東郷町総合文化センター)  
 レセプション(会場：ホテルベルフォート日向)  
 第2日：歌碑祭、牧水生家見学、若山牧水記念文学館開館セレモニー、記念植樹  
 参加者：浅井治、有賀直子、金子安夫、北村正昭、小出和夫、杉山重義、鈴木弘行、千野慎一郎、長澤靖夫、林茂樹、保坂輝夫、保坂淳江、三宅芳則、三澤幸男、小野義雄、大島葉子
- (2) 第6回「百草園牧水碑前祭」(東京牧水会主催)  
 日 時：平成17年 8月21日(日) 正午  
 会 場：東京都日野市百草園 牧水歌碑前  
 参加者：金子安夫、小出和夫、三宅芳則、勝又十枝、赤澤照雄
- (3) 第30回 裾野牧水祭  
 (裾野市立鈴木図書館短歌会、裾野市教育委員会主催)  
 日 時：平成17年 9月11日(日) 午前10時  
 会 場：裾野市民文化センター牧水歌碑前  
 祝電打電
- (4) 第55回 東郷町「牧水祭」(宮崎県東郷町主催)  
 日 時：平成17年 9月17日(土) 午前10時  
 会 場：旧牧水記念館裏牧水歌碑前及び総合文化センター  
 祝電打電
- (5) 第6回 日向「牧水祭」(日向牧水顕彰会主催)  
 日 時：平成17年10月23日(日) 午前9時30分  
 会 場：日向市米の山及び富島漁協大研修室  
 祝電打電

## 2 第52回沼津牧水祭の運営

- (1) 短歌大会  
 日 時：平成17年10月2日(日) 午前10時30分～午後4時  
 会 場：沼津市立図書館 視聴覚ホール  
 講 師：永田和宏氏(「塔」主宰、第3回若山牧水賞受賞者)  
 河野裕子氏(「塔」選者、第6回若山牧水賞受賞者)  
 応募短歌：236首  
 参加者：164人
- (2) 碑前祭・芝酒盛  
 日 時：平成17年10月16日(日) 午前11時～午後2時  
 会 場：千本浜公園 牧水歌碑前  
 参加者：約300人

## 3 文学講演会及び文学講座等の開催

- (1) 文化講座  
 「家紋の世界」  
 日 時：平成17年 9月10日(土) 午後1時30分～午後3時30分  
 会 場：沼津市若山牧水記念館会議室  
 講 師：八十濱俊一氏  
 参加者：74人
- (2) 第18回「雛の歌会」  
 日 時：平成18年 3月11日(土) 午後1時30分～午後3時45分  
 会 場：沼津倶楽部  
 講 師：米川千嘉子氏(「かりん」、第9回若山牧水賞受賞者)  
 応募短歌：93首  
 参加者：63人
- (3) 初心者のための短歌講座  
 日 時：平成17年 4月～平成18年 3月  
 毎月第2土曜日 午前10時～12時  
 会 場：沼津市若山牧水記念館会議室  
 講 師：須永秀生氏  
 参加者：延べ 151人
- (4) 牧水記念館短歌会  
 日 時：平成17年 4月～平成18年 3月  
 毎月第2土曜日 午後1時30分～3時30分  
 会 場：沼津市若山牧水記念館会議室  
 講 師：須永秀生氏  
 参加者：延べ 159人

## (5) 書道講座

日 時：平成17年 4月～平成18年 3月  
 毎月第3火曜日 午後1時～3時

会 場：沼津市若山牧水記念館会議室  
 講 師：成田真祠氏  
 参加者：延べ 167人

## (6) 第16回「中学生短歌コンクール」募集・表彰

募集期間：平成17年 5月10日(火)～9月10日(土)  
 応募短歌：1,433首 (17校 1,433人)  
 入選短歌：53首 (53人)  
 選 者：青木朝子、川口和子、須永秀生、杉山芳春、曾根耕一  
 表 彰：平成17年10月16日(日)沼津牧水祭碑前祭にて

## 4 企画展示

### (1) 平成16年度 書道講座受講者作品展示

期 日：平成17年 3月29日(火)～4月10日(日)  
 会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ  
 入 場 者：788人

### (2) 平成17年度 書道講座受講者作品展示

期 日：平成18年 3月29日(火)～4月9日(日)  
 会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ  
 入 場 者：635人

### (3) 「家紋の世界」の資料展示

期 日：平成17年 9月6日(火)～9月19日(日)  
 会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ  
 入 場 者：714人

### (4) 「中学生短歌コンクール」入賞作品(短冊)展示

期 日：平成17年10月16日(日)～10月30日(日)  
 会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ  
 入 場 者：568人

## 5 音楽イベント

### 第1回 古楽コンサートシリーズ17

『古楽器による郷愁のコンサート』  
 日 時：平成17年 6月25日(土) 午後7時45分  
 会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ  
 出 演：上杉紅蓮(リコーダー、横笛)  
 堅田喜代(小鼓、大鼓)  
 杉山佳代(チェンバロ)

来 場 者：137人

### 第2回 岡村喬生が全登場人物を歌い唄り演じ分ける新モノオペラ

『男と女の人情歌物語』  
 日 時：平成17年 7月26日(火) 午後6時30分  
 会 場：沼津市千本プラザ 音楽ホール「松籟」  
 出 演：岡村喬生(バス・バリトン)  
 磯部周平(クラリネット) 安田裕子(ピアノ)

来 場 者：193人

### 第3回 「久元祐子 ピアノ名曲コンサート～初秋に聴くクラシック～」

日 時：平成17年 9月3日(土) 午後6時30分  
 会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ  
 出 演：久元祐子(ピアノ)

来 場 者：74人

### 第4回 「モーツァルトとドビュッシー 歌曲の夕べ」

日 時：平成17年11月12日(土) 午後6時30分  
 会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ  
 出 演：鈴木千香子(メゾソプラノ)  
 濱野さえ子(ソプラノ)

来 場 者：101人

### 第5回 古楽コンサートシリーズ18

『ヴィオラ・ダ・ガンバとチェンバロの夕べ』  
 日 時：平成18年 2月18日(土) 午後6時45分  
 会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ  
 出 演：神戸倫樹美(ヴィオラ・ダ・ガンバ)  
 杉山佳代(チェンバロ)

来 場 者：125人

### 第6回 藤原真理チェロリサイタル「白鳥」

日 時：平成18年 3月4日(土) 午後6時30分  
 会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ  
 出 演：藤原真理(チェロ) 丸山滋(ピアノ)

来 場 者：133人

## 社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

第一条 この法人は、社団法人沼津牧水会という。

第二条 この法人は、事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の一一に置く。

第三条 この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短歌文学の普及を図り、もって、教育文化の振興に寄与することを目的とする。

第四条 この法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

(1) 歌人若山牧水に関する調査研究

(2) 沼津牧水祭（短歌大会及び碑前祭）の運営

(3) 文学講演会及び文学講座の開催

(4) 文学に関する各種出版物の刊行

(5) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託

(6) その他前条の目的を達成するために必要な事業

第五条

(1) 正会員 この法人の目的に賛同して入会した個人又は法人

(2) 賛助会員 この法人の事業を援助する個人又は法人

(3) 名誉会員 この法人に特に功労のあつた者で、総会の議決をもって推薦された者

第六条

会員にならうとする者は、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続きを要せず、本人の承諾をもって会員となるものとする。

第七条

この法人の入会金は、次のとおりとする。

(1) 正会員 一〇、〇〇〇円

(2) 賛助会員 三〇、〇〇〇円以上

この法人の会費は、次のとおりとする。

(1) 正会員 年額 五、〇〇〇円

(2) 賛助会員 年額 一〇、〇〇〇円以上

2

この法人の会費は、次のとおりとする。

〈理事長〉林 茂樹 〈副理事長〉杉山 光男  
 〈理事 専〉浅井 治 保坂 輝夫 田中 和男  
 四方 一弥 八十濱俊一 杉山 芳春 川口 金子  
 星谷 亜紀 八十濱俊一 杉山 芳春 長澤 靖夫 青木 朝子  
 〈監 事〉杉山 重義 鈴木 弘行  
 〈事務局長〉金子 安夫 〈事務局〉大島 葉子 伊藤早智子 羽根田治子

## 編集後記

昨年第五十二回「沼津牧水祭・短歌大会」には、永田和宏、河野裕子ご夫妻に講師としておいでいただきましたが、永田和宏先生から「牧水の歌の愛誦性」についての玉稿を頂戴いたしました。厚く御礼申し上げます。

宮崎県東郷町（本年二月に日向市と合併）で開催された「若山牧水顕彰全国大会」には、沼津からも大勢で参加いたしました。充実した「集い」で、主催者に深く敬意を表します。若山牧水延岡顕彰会の方々のバスツアーも楽しく、思い出に残る大会でした。

「沼津牧水祭・碑前祭」には、東郷町からも遠路ご参加いただきました。にぎやかに開催できました。若山牧水賞受賞者の米川千嘉子先生をお招きしたの「雛の歌会」も素敵な歌会でした。

八十濱俊一氏の家紋についての「文化講座」と「展示」から、日本人の美意識を再認識いたしました。「書道講座」の受講者による作品展からは、継続して行くことの大切さを学びました。

「記念館コンサート」は、素晴らしい企画だとおほめいただいております。うれしいことです。

昨年は、全国的に市町村合併が進み、馴染みのあった名前が消えてしまい、新しい市の名前を覚えるのが大変な年でした。

これからもよろしくお願ひ申し上げます。